

労働力調査の結果を見る際のポイント No.7

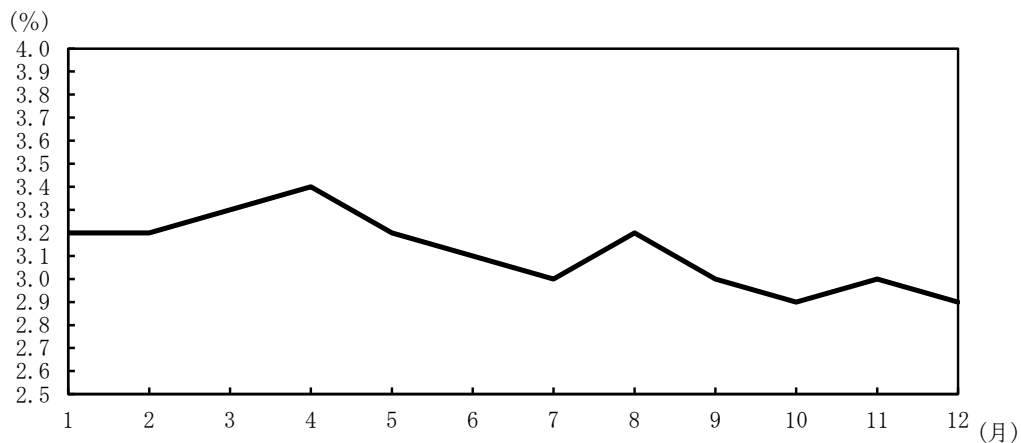
季節調整値の改定

～季節調整値は毎年1月分結果公表時に、過去に遡って改定～

季節調整値を過去に遡って改定しましたので、その概要を説明します※¹。

- 労働力調査のような月次統計の原数値には季節変動が含まれます。例えば、図1に示すように、毎年3月から4月にかけて、定年や雇用契約の満了による離職者、学卒未就職者などが一時的に完全失業者となることがあるため、完全失業率が高くなる傾向にあります。

図1 完全失業率の原数値の動き (2016年)



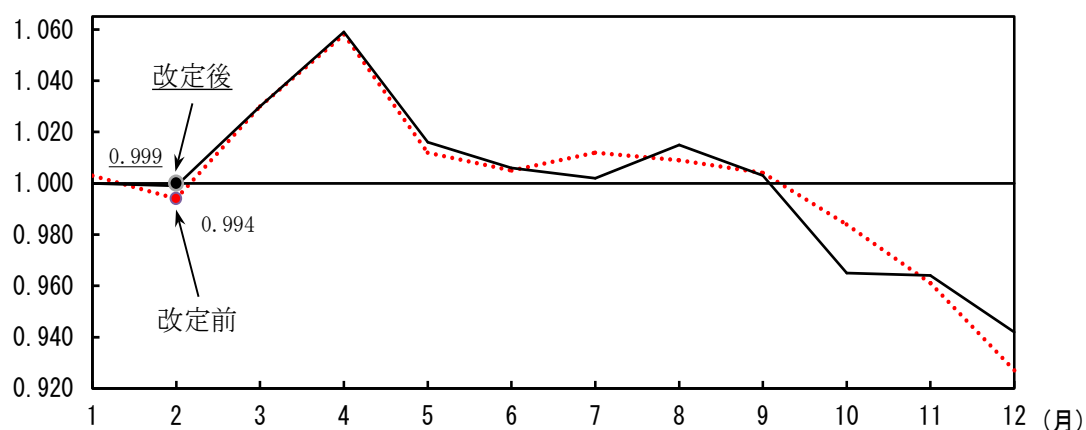
- 足元の動き、すなわち前月からの変化を適切にとらえるためには、こうした季節変動の影響を除く必要があります。そこで、完全失業率のほか、就業者数などの主な集計項目について、原数値から季節変動を除いた「季節調整値」を求めて、公表しています。
- 季節調整値を算出する際には季節指数(季節変動を表す指数)を推計する必要がありますが、季節変動のパターンは、毎年少しずつ変化しています。そこで、直近の季節変動パターンを結果数値に的確に反映させるため、労働力調査では、毎年1月分結果公表時に、過去の時系列データに前年12か月分の結果を追加して、過去に遡って計算し、過去10年分の数値を改定しています※²。

※1 [「労働力調査の結果を見る際のポイント No.4\(原数値と季節調整値\)」](#)も併せて御参照ください。

※2 改定後の季節調整値は、[長期時系列データ](#)に掲載。

- 2016年12月までのデータを加えた今回の改定についてみると、2016年の季節指数は、図2に示すように、改定前と改定後で変化していることが分かります。

図2 改定前後の季節指数（完全失業率，2016年）



この結果に基づいて2016年2月の完全失業率の季節調整値を求めてみると、次のようになります。

$$\begin{aligned}
 & \text{(改定前)} \quad \underbrace{\frac{213 \text{ (完全失業者数)}}{6564 \text{ (労働力人口)}}}_{\text{完全失業率(原数値)}} \times 100 \div 0.994 \text{ (季節指数)} \quad \doteq \quad 3.3\%
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 & \text{(改定後)} \quad \frac{213 \text{ (完全失業者数)}}{6564 \text{ (労働力人口)}} \times 100 \div 0.999 \text{ (季節指数)} \quad \doteq \quad 3.2\%
 \end{aligned}$$

- 下表は、完全失業率について、今回の改定状況を示すものです。2016年は、2月が-0.1ポイントの改定となります。

表 季節調整値の改定状況（完全失業率，2016年）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
改定前(%)	3.2	3.3	3.2	3.2	3.2	3.1	3.0	3.1	3.0	3.0	3.1	3.1
改定後(%)	3.2	3.2	3.2	3.2	3.2	3.1	3.0	3.1	3.0	3.0	3.1	3.1
差(ポイント)	0.0	-0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

網掛けは、改定前後の値に差がある箇所。